

R 7. 12. 3
25S3002
芦沢 茂喜

「本当に怖いのは、人」

木村 瑞穂 先生
倉田 麻比子 先生

お忙しい中、講義をして頂き、ありがとうございました。

2020年、新型コロナウィルスの流行から続くコロナ禍と呼ばれる期間のすべてを、私は山梨県の保健所で感染症を所管する部署で勤務しました。元々は精神保健福祉を担当しておりましたが、感染症を所管している部署であるとともに、リーダー職であったため、BCPに基づき、新型コロナ対応に専念しました。

コロナの前と後では、保健所の状況は大きく変わりました。電話という電話が鳴り続け、夜中になっても鳴りやまず、一時期は夜中の3時、4時に帰宅し、8時30分には出勤するという生活を続けました。社会が大きく変わったと感じました。

連日のように、テレビ、新聞などの報道が続き、その報道を見て、心配になった人たちの電話が鳴る。心配の電話だけでなく、電話が繋がらないことに対する苦情やコロナにより仕事を制限され、生活ができないとの不満など、あらゆる内容のものが保健所には届きました。電話だけでなく、直接来所され、苦情を言う方も沢山いました。

方針は知らないところで決まり、テレビや新聞などを通して、いきなり報道され、それを見た方々が「どうなっている。テレビで言っていたぞ」と電話をしてくる状況も繰り返され、職員は疲弊し、かなりの人数が退職をしました。

コロナワクチンに関しても、初めの頃は保健所職員も優先接種に組み込まれ、意思確認を求められることもなく、強制的に接種日、時間が決められ、保健所職員であれば、接種するのが当然という空気が作られていました。

今回のお話を聞きながら、改めてコロナ対応をしていた時期のことを思い出し、その時に感じた思いを改めて感じました。それは、コロナは怖い。でも、本当に怖いのは人であり、感染症は災害であるとともに、人災にもなり得るということでした。

問題そのものをどう分析し、対策を立てるのかにより、問題は大きくなり、新たな問題が生じてしまう。また、目の前の見えるところだけどうにかしようと、モグラたたきのように行けば、モグラが目の前に見えなければ、問題は終わったこと、なかつたことにされてしまう。新たな感染症が生じた場合、今回の教訓を生かすことができるのかと言えば、個人的にはまた同じようなことをしてしまうのではないかと危惧しております。

今回は、体調なども大変な中で、貴重なお話をありがとうございました。言つていかなければ、終わったことにされてしまうため、言い続け、多くの人が自分事として考えてい

ける取り組み、仕組みが必要だと思いました。

本日は本当にありがとうございました。